中唐蘇州文壇の理論形成における顧況の文學とその文學觀について

土谷彰男

一

中國文學史の記述において、盛唐は、韻律の整備とあわせて「建安の風骨」の發揚により詩歌の内容を充實させた時代、つづく中唐は、文學の擔い手の遷移とともに作詩の現場が集團に依存した時代とされる。顧況（七二七？―八一六？）は、中唐の早い時期に活躍した詩人とみなされ、一方、その詩風は「盛唐の風骨」を殘すと言われるように[1]、転換期の詩人という位置付けが與えられている。盛唐から中唐へのこのような時代的展開のなかで、彼はかつて一度、韋應物（七三五？―七九二？）を領袖とする蘇州文壇に參畫したことがある。韋應物は貞元五年（七八九）以降、蘇州において顧況のほか、劉太眞（七二五―七九二）、孟郊（七五一―八一四）、皎然（七二〇？―？）、秦系（七二〇―八〇〇？）らと詩を唱和應酬してきた。この間の作を仔細に檢討すると、彼らの間には詩歌の批評と創作について一定の共通認識が醸成され、この地にひとつの文壇が形成されるに至ったと考えられる。このような觀點から筆者はこれまで、韋應物の「郡齋雨中與諸文士燕集」詩を中心として、五言古體詩型に關わる創作と評論にもとづく蘇州文壇が形成された、その過程を考察してきた[2]。

本稿では、そのうち顧況の文學とその文學觀について、とくにこの蘇州文壇の理論形成において關鍵となる、南朝文學に對する肯定的な認識という點に着目し、考察していきたい。その際、顧況と近い位置にあり、これまであまり論じられることのなかった劉太眞についても採りあげ、あわせて檢討する。

二

顧況の生涯に亙る創作活動において、貞元五年の左遷はひとつの分岐點と看做される[3]。これより以前、顧況は「上古之行補亡訓傳十三章」詩（卷一）、「棄婦詞」詩（同）、などの社會詩を作り、政治に積極的に參與する意志を見せていた。「上古之行補亡訓傳十三章」

詩は全篇四言からなり、それぞれに小序を付しているなど、形式や内容から、この時代においては、杜甫（七一二―七七〇）や元結（七一九―七七二）に連なるもの、あるいは儒家思想に基づき復古を唱えた蕭穎士（七〇九―七六〇）の影響を強く受けたものとされる。[4] 貞元三年（七八七）、柳渾（七一六―七八九）が宰相となると同時に校書郎の任に就くものの、やがて著作郎の職に遷る。そして貞元五年のこの年、柳渾、同じく宰相の李泌（七二二―七八九）が相繼いで薨じると、顧況はおのれの才に恃んで當時の貴顯を侮蔑したために彈劾され、饒州司戸參軍に左遷された。[5] これ以降、ほどなくして任官をあきらめ故郷の茅山に戻り、隱遁生活を送ることになる。韋應物と詩を唱和したのは、この貞元五年の左遷の途次のことであり、ほかにも杭州刺史の房孺復（七五六―七九七）、信州刺史の劉太眞などともそれぞれ應酬した。

劉太眞は、大曆十四年（七七九）に起居郎を拜して中央官の職を得たのち、貞元元年（七八五）、同三年と禮部侍郎となり、同四、五年には貢擧を掌ったものの、この年には信州刺史に左遷された。[6] 劉太眞はここで顧況の來訪をうけ、「三君子（＝韋應物・房孺復・韋贊―生卒不詳）の風を繼ぐ」とする作をもって應酬することとなる。いま、顧況、劉太眞のそれぞれの作を見てみる。

酬本部韋左司　　顧況

好鳥依佳樹　　飛雨灑高城
況與數君子　　列坐分兩楹
文雅一何盛　　林塘含餘清
我公未歸朝　　遊子不待晴
白雲帝城遠　　滄江楓葉鳴
卻略欲一言　　零淚和酒傾
寸心已摧折　　別離重骨驚
安得凌風翰　　肅肅賓天京

（『顧況詩注』巻一）[7]

顧十二況左遷、過韋蘇州、房杭州、韋睦州三使君、皆有郡中燕集詩。辭章高麗、鄙夫之所仰慕。顧生既至、留連笑語、因亦成篇、以繼三君子之風焉。　　劉太眞

寵至乃不驚　　罪及非無由
奔迸歷畏途　　緬貌赴偏陬
牧此彫弊甿　　屬當賦斂秋
夙興諒無補　　旬暇焉敢休
前日懷友生　　獨登城上樓
迢迢西北望　　遠思不可收
今日車騎來　　曠然銷人憂
晨迎東齋飯　　晚度南溪遊
以我碧流水　　泊君青翰舟
莫將遷客程　　不爲勝境留
飛札謝三守　　斯篇希見酬

（『全唐詩』巻二五二）

顧況の作にみえる「安んぞ凌風の翮もて、肅肅として天京に賓たるを得んや（安得凌風翮、肅肅賓天京）」の表現は、直接は韋應物の郡斎燕集詩にみえる「神は歡びて體自ら輕く、意は風を凌ぎて翔けんと欲す（神歡體自輕、意欲凌風翔）」句を承けているが、さらに典拠として、謝朓の「直中書省」詩にみえる「安んぞ凌風の翮もて、聊か山泉の賞を恣にするを得んや（安得凌風翮、聊恣山泉賞）」[8]を踏まえ、それを翻案して呼應させたものである。このように措辭の次元において謝朓の作を援用するほかに、表現の次元においても謝朓の作詩に倣う部分がみられる。例えば、劉太眞は「夙興諒に補うなし、旬暇焉んぞ敢えて休まん（夙興諒無補、旬暇焉敢休）」と述べるように、職務の繁閑に言及しているところは、謝朓の作品に頻出するものである。[9]このほかにも、七言絶句型の秦系「卽事奉呈郎中韋使君」詩（『全唐詩』巻二六〇）に「詩興到り來りて一事なし、郡中今有り謝玄暉（詩興到來無一事、郡中今有謝玄暉）」とあるように、郡主としての韋應物の姿を謝朓のそれに見立てる表現さえ見られる。このように、韋應物、顧況、劉太眞のいずれの作も長編の五言古體詩という型式を採用し、また秦系の作をあわせて見れば、その作詩の背景には南朝斉の宣城太守であった謝朓の文學とその像が彼らの間に共通の了解としてあったことは注意される。[10]

顧況はこのほかにも、劉太眞に「酬信州劉侍郎兄」詩（『顧況詩注』巻一）、房孺復に「酬房杭州」詩（同）を應酬しており、これらはいずれも五言古體詩型に拠ったものである。唱和應酬の作における五言古體詩型の使用について顧況の作例を調べてみると、この三例のほか、漳州刺史の張登（？―八〇一）に應酬した「酬漳州張九使君」詩（同）などの數例がみられるだけで、このことにより、この型式による作詩がこの集團の間にとくに集中していたことが明らかである。應酬の作にはほかにも、「酬唐起居前後見寄二首」詩（巻三）、「奉酬茅山贈賜幷簡綦毋正字」詩（同）、「酬揚州白塔寺永上人」詩（同）があるが、いずれも五言律詩型であり、また、宰相・柳渾に應酬した「酬柳相公」詩（巻四）、韓滉に應酬した「奉和韓晉公晦日呈諸判官」詩（同）はいずれも七言絶句型であって、どれも近體詩型である。このことからも、この集團において五言古體詩型の使用が際立っているということが確認できよう。寄贈や送別の類を含めても、顧況の作例に五言古體詩型の作例は多くは見られない。[11]

三

顧況は貞元三―五年の間、中央官の職にあって臺閣派文學集團の一翼を擔っていた。これ以前にも、中央文壇と關わりを保っていたと考えられる。彼は儲公羲（七〇六―七六二）の集に序を附して、次のように言う。

…開元十四年、嚴黄門知考功、以魯國儲公進士高第、與崔國輔

員外、綦毋潛著作同時。其明年、擢第、常建少府、王龍標昌齡、此數人皆當時之秀、而侍御聲價隱隱、轔轢諸子。

「監察御史儲公集序」（『全唐文』巻五二八）

開元十四年（七二六）の科擧にて儲公羲と同じく登第したのが、崔國輔（六七八？―七五五？）、綦毋潛（不詳）であり、また翌年には常建（七〇八―七六五）、王昌齡（六九八―七六五）が登第したことを述べる。ここで注意されるのは、ここに名を擧げる人物のいずれもが『河岳英靈集』にその詩が採錄されていることである。

殷璠の撰になる『河岳英靈集』は、開元・天寶年間の盛唐詩人を中心に延べ二十四名、計二百三十四首の詩篇を收める。その序には「開元十五年後、聲律風骨始備矣」とあり、また「璠今所集、頗異諸家、既閑新聲、復曉古體、文質半取、風騷兩挾、言氣骨則建安爲傳、論宮商則太康不逮」[12]とあるように、「風骨」を重視し選評の基準を「復古」に置いたことを明らかにする。儲公羲は、文學史の記述においては王維や孟浩然などの山水田園詩の一派に連なる詩人とされるが、當時の評価によると、「建安の風骨」を繼承する代表的な盛唐詩人と見られ、『河岳英靈集』には「倣古二章」などの社會詩が採錄されているとの指摘があるように、[13]この時代においては復古の詩人としての側面が強調されていた。

顧況は、さきほどの序のなかで儲公羲について「雖無雲雷之會、意氣相感、而扶危拯病、綽有賢達之風」と述べる。そのなかで「扶危拯病」については、當時の狀況を說明するものとして注目される。いま『河岳英靈集』の記述を手がかりとすると、その序に「斉、梁、陳、隋、下品實繁、專事拘忌、彌損厥道」とあり、また王昌齡を評して「元嘉以還、四百年內、曹（曹値―筆者注、以下同じ）、劉（劉楨）、陸（陸機）、謝（謝靈運）、風骨頓盡。頃有太原王昌齡、魯國儲公羲頗從厥迹」（巻下）とある。これらの記述と合せて考えると、顧況は、「危病」の語によって氣骨を失った詩篇が六朝以降に繁多となった（下品實繁）狀況を示し、儲公羲がそういった狀況を救濟（扶拯）したと述べていよう。このように考えると、顧況は儲公羲に對して確かに復古の詩人として認めていたと見られるのである。このことにより、顧況の位置はこのころ、陳子昂以來盛んに唱導されてきた「風骨」と「復古」と無緣ではなく、その意味において顧況は盛唐詩人に連なるものといえる。ただ、彼の作詩においては、さきにも指摘したように、その社會詩にみられる表現は杜甫や元結の影響を強く受けるとされることから、このような狀況的な理念と自身の實作との間には規範とすべきものの差異が存在することが注意されるのである。

いったい顧況が自身の文學觀を表明したものとして『文論』を擧げなければならないが、これは儒家的精神を發揚する立場から、文の価値や効用を唱えたものである。

○周語之略曰、孝、敬、忠、信、仁、義、智、勇、教、惠、讓、

皆文也。

○文顧行、行顧文。[14] 文行相顧、謂之君子之文。

○日月麗於天、草木麗於地、風雅亦麗於人、是故不可廢。廢文則廢天、莫可法也。廢天則廢地、莫可理也。廢地則廢人、莫可象也。郁郁乎文哉、法天、理地、象人者也。

「文論」(『全唐文』巻五二八)

この文章の主眼は、儒家の徳目を「文」に比定しそれを唱導するところにあり、その「文」こそが天地の運行に規則を與え人間の存在を浮かび上がらせるものだとする。また、「風雅も亦た人に麗たり、是れ故に廢すべからず(風雅亦麗於人、是故不可廢)」と述べるように、この「文」を經書のひとつである「毛詩(詩經)」を指すものとして見ることも可能であろう。いずれにしても顧況は「文」を儒家思想の側に引きつけて說いているのである。また、この「文論」にはこれとはほかに、彼の文學觀の一端を示す次の部分がある。

建安、正始、洛下、鄴中、吟咏風月、此其所以亂文也。

顧況は、漢魏から始まり六朝以降の文學が「文を亂す」ものとして、それを否定的に見る評価を與えている。狀況的な理念形成として顧況の立場が「漢魏の風骨」にあったということはすでに見てきた通りであるが、ここではそれすらも否定しようとすることになる。しかしながら、この矛盾は次に見える一文よって止揚される。

大抵文體十年一更。有體病而才贍、有言紆而事直、有文勝而理乖。雅艶殊致、雲和之源、杳以無窮。

「禮部員外郎陶氏集序」(『全唐文』巻五二八)

『河岳英靈集』にもその詩を收錄する陶翰(?―七五四?)の集に序を附すなかで、顧況は文體の變化とその狀態について言及する。本來この序の前半部分には「行在六經、志在五言」とあるように、儒家の觀點に拠りとくにその「行」と「志」について、さきの『文論』と同じような論調が展開されているのであるが、「文」に對する見解についてはここに至って大きく變容している。すなわち、文體は十年で變化することを述べ、體格、言辭、裝飾についてそれぞれ相反する狀態を竝べた後に、「雅艶殊致」と述べるのである。[15]「雅」は「雅正」、「艶」は「艶麗」のことであり、ここでは前者を詩經から続く詩歌の正統性を評する語として、後者を南朝宮體詩に代表される文學のそれとそれぞれ連絡する表現と見るならば、このふたつは互いに異なりながらも竝存しうるものであるという認識を示しているといえる。ふたつの相容れない価値を、いずれか一方を採るのではなく、それぞれに對し肯定しようとするのである。顧況はこのような認識を獲得したことによって、創作において當時のいわば教條主義的な隘路に陷ることから免れ、その結果として多彩な詩篇の

數々を生み出すことが可能になったと考えられるのである。[16]

四

顧況は校書郎から著作郎へ遷るが、いずれも中央官であった。一方、史書によれば、彼は權要を握れなかったばかりに得意の日々を送ることはなかったようである。しかしながらこの間には臺閣文學集團に參畫する機會を得ることになる。ただ、臺閣のなかでより指導的な立場にあったのは禮部侍郎の任にあった劉太眞のほうであると見られる。[17]

劉太眞は、蘇州文壇の形成における理論的構成者の一人である。韋應物の郡齋宴集詩に應えて、さきに見た詩篇のほかに書信を贈っており、そのなかで韋應物の文學について言及する。そのうち次の部分は、この文壇の特質を考察するうえでも重要な一節である。

宋斉間、沈謝何劉、始精于理意。緣情體物、備詩人之旨。後之傳者、甚失其源。

「與韋應物書」(『全唐文』巻三九五)

劉太眞は、沈約、謝朓、何遜、劉孝綽の名を擧げてこれら南朝詩人の文學を肯定的に觀察する。ここで注意されるのが「緣情」についての認識である。「緣情」の語は、陸機「文賦」に見える「詩は情に緣りて綺靡たり、賦は物を體して瀏亮たり(詩緣情而綺靡、賦體物而瀏亮)」のことであり、もともと文體の分類上の特質を述べたものである。だが後世になるとしばしば「綺靡」によりすぎた修飾を批判するために援用されるようになり、この意味では「情」の過剰を否定的に評価することと連絡する。[18] しかしながら劉太眞はここでこの語をもって、性情の流露に導かれた自然な修辭によってこそ詩は優れると主張するのである。この時期、大曆期前後の詩人の作の多くが韻律や典拠に作意を凝らすあまり典型に陷ることを免れなかった實態を想起すれば、このような南朝文學の觀點を提起することは重要な意味を持つと看做せるのである。

ところで、劉太眞は若いころ蕭穎士に師事し詩作を學んでいた經歷を持つ。蕭穎士は、李華(七一五—七六六)とともに「蕭李」と称され、儒家の經典に基づいた古文の復古を唱えた。のちの元和年間における韓愈・柳宗元の古文復古運動の先駆けをなすものとされる。その詩歌は、國風に倣って四言詩に小序を付した作が見られるほかに、五言古體詩型の作例が全體の大半を占める。劉太眞には現存する詩篇が極めて少なく、そのため蕭穎士から受けた影響を仔細に檢討することは困難であるが、當時、蕭穎士のこのような文學觀が彼自身の詩作に大きく作用していたことは疑いえない。

劉太眞が進士に及第し校書郎を授けられた際、河南府參軍の任にあった蕭穎士は、劉太眞に送別の詩を贈った。自身の手になるその序には、蕭穎士の學問觀や文學觀を窺わせる部分がある。

…學也者、非云徵辨說、摭文字、以扇夫談端、輕厥詞意。其於識也、必鄙而近矣。所務乎憲章典法、膏腴德義而已。文也者、非云尚形似、牽比類、以局夫儷偶、放於奇靡。其於言也、必淺而乖矣。所務乎激揚雅訓、彰宣事實而已。衆之言文學者或不然、…。

「江有歸舟三章、并序」[19]（『全唐詩』巻一五四）

蕭穎士の文學觀は、「文也者」以下に端的に示されている。すなわち、形式上の相似や類似を否定したうえで、繁多な對偶や華美な表現を退けようとする。そうでなければ、その言辭は淺薄で偏狹となると述べる。ここで注意されるのが、「儷偶」、「奇靡（綺靡）」から窺える蕭穎士の認識である。彼はこの二者のいずれに對しても否定的な見方を示しているが、仮に「儷偶」を「體物」、「奇靡」を「緣情」と連絡するものと考えるならば、この部分はさらに南朝文學の弊害に對する反省の態度が明らかにされていると見ることができよう。なぜなら、直後に「雅訓を激揚し、事實を彰宣す」ると述べており、このような態度こそ儒家思想に基づいた王佐のための文學、すなわち載道の文學を標榜することにほかならず、その點において南朝文學は否定されなければならない存在だからである。蕭穎士の文學觀は、まさに載道文學の觀念と軌を一にするものなのである。

このように見てみると、ここに至って南朝文學に對する劉太眞の觀點と蕭穎士のそれとは、大きく乖離していたことは明らかである。[20] 顧況は、劉太眞の集に序を附すなかで、蕭穎士との關係に觸れることはあっても彼の儒家的な位置には言及していない。そればかりか、彼の詩歌に對しても「遊名山而窺洞壑者、畧舉奇峯、紀勝境。至於鬼怪、不可紀焉」（「信州刺史府君集序」、『全唐文』巻五二八）と述べるのみで、ここから載道の文學を窺おうとするのは難しく、むしろ儒家的な文學觀から變化の過程を經てきたと考えるのが妥当であろう。さきにも見てきたように、顧況は儒家的精神を發揚するあまり一度は「風骨」さえも否定したものの、そのような理念と實作との相克を乗り越える觀點を獲得したことにより、おのれの文學を自由にさせることが可能となった。劉太眞についても同じように、このような過程を經たことが予想されるのである。蘇州文壇の形成とそれに與えられた理論的側面は、こういった過程のなかにあるものとして考えていかなければなるまい。

注

(1) 皇甫湜「唐故著作郎顧況集序」（『全唐文』巻六八七）に「李白、杜甫已死、非君將誰與歟」、また厳羽『滄浪詩話』に「稍有盛唐風骨処」とある。

(2) 「中唐初期における蘇州文壇の形成についての一考察――文學理論の展開と五言古體詩について――」（『松浦友久博士追悼記念中國古典文學論集』、研文出版社、二〇〇六）。なお、韋應物「郡齋雨中與諸文士燕集」詩については、次の通りである。

兵衛森畫戟　宴寢凝清香　海上風雨至　逍遙池閣涼
煩痾近消散　嘉賓復滿堂　自慚居處崇　未睹斯民康
理會是非遣　性達形跡忘　鮮肥屬時禁　蔬果幸見嘗
俯飲一杯酒　仰聆金玉章　神歡體自輕　意欲凌風翔

吳中盛文史　群彥今汪洋　方知大藩地　豈曰財賦疆

なお、韋應物の作品については、『韋應物集校注』（陶敏、王友勝校注、上海古籍出版社、一九九八）を底本とし、また、とくに注をつけない他の詩人の作品については、『全唐詩』（中華書局、一九六〇）、『全唐文』（同、一九八三）を底本とした。

（3）鄧紅梅「顧況詩歌新論」（『蘇州大學學報』哲學社會科學版、一九八八）。

（4）王敬興「顧況文學思想和詩歌創作」（『文學遺產』一九八五年第三期）。

（5）『舊唐書』卷一八三・本傳に「柳渾輔政、以校書郎徵。復遇李泌繼入、自謂己知秉樞要、當得達官、久之、方遷著作郎、況心不樂。求歸於吳、而班列郡官、咸有侮玩之目、皆惡嫉之。及泌卒、不哭、而有調笑之言、爲憲司所劾、貶饒州司戶」とある。

（6）劉太眞の左遷は顧況と同年であり、かつ、韋應物も貞元四年末ごろまでには左司郎中から蘇州刺史に転出していることを考えあわせると、柳渾・李泌の死後、中央朝廷において、劉太眞らに不利益となる何らかの動きがあったことが予測される。『唐五代文學編年史・中唐卷』（遼海出版社、一九九八）の唐德宗貞元四年九月の項目には、李泌の補政および薨去に時機を合わせるかのように、韋應物、および令狐峘（『舊唐書』卷一四九）の中央官登用と地方転出があることを指摘する（四四六頁）。劉太眞詩に「寵至乃不驚、罪及非無由」、それに應酬した顧況詩に「劉兄本知命、屈伸不介懷」とあり（劉太眞が左遷された直接の理由は、知貢擧の際に自身の親族門弟ばかりを及第させてたことが嫌われたため）、また劉太眞の事跡を記した裴度「劉府君神道碑銘」（『全唐詩』卷五三八）に「適値時棟變更、朝柄奪移、…出爲信州刺史」とあることも注意される。

（7）顧況の作品については、詩歌は『顧況詩注』（王啓興、張虹注、上海古籍出版社、一九九四）を底本とし、適宜、『顧況詩集』（趙昌平校編、江西人民出版社、一九八三）、および『全唐詩』を參照した。また散文は『全唐文』を底本とした。

（8）『謝宣城集校注』卷三（中華書局、二〇〇一）。

（9）「冬日晚郡事隙」詩（『謝宣言城集校注』卷三）に「案牘時閒暇、偶來觀卉本」、「直石頭」詩（同、卷四）に「摂官因時暇、曳裾聊起望」、また「和蕭中庶直石頭」詩（同）に「讌嘉多暇日、興文起淵調」などとある。

（10）こののち、劉禹錫が蘇州刺史に赴任する際、白居易は「送劉郎中赴任蘇州」詩（『全唐詩』卷四六二）のなかで「…宣城獨詠窗中岫、柳惲單題汀上蘋。何似姑蘇詩太守、吟詩相繼有三人」と述べることにより、白居易においても郡主の地位と謝朓の文學との間に關連付けがなされていることが確認できる。なお、ここでいう「三人」は、白居易の自注によると、韋應物・白居易・劉禹錫のこと。

（11）蔣寅氏は『大曆詩人研究』（中華書局、一九九五）のなかで、顧況の詩には送別・寄贈・應酬の作例が極めて少ないことから、顧況を地方官詩人、あるいは臺閣詩人のいずれかに帰属させるのは適當ではないと指摘し（三八一頁）、またそういった作例が少ないがゆえに、結果として彼の詩歌に独創性や能動性がもたらされたと述べる（三八四頁）。

（12）『河岳英靈集』については、『唐人選唐詩新編』（傅璇琮撰編、陝西人民教育出版社、一九九六）を底本とし、適宜『唐人選唐詩十種』（上海古籍出版社、一九五八）、『河岳英靈集注』（王克讓著、巴蜀書社、二〇〇六）を參照した。

（13）李珍華、傅璇琮『河岳英靈集研究』（中華書局、一九九二）。

（14）李華「贈禮部尚書清河孝公崔沔集序」（『全唐文』卷三一五）に「文顧行、行顧文、此其與於古歟」とある。

（15）陸機「文賦」（『文選』卷十七、上海古籍出版社）に「雖一唱而三歎、固既雅而不艶」とあり、李善注に「言作文之體、必須文質相半、雅艶相資」とあって、李善は雅・艶それぞれが互いに均衡している状態が理想とされると述べる。

（16）蔣寅氏、趙昌平氏、査屏球氏の三者はいずれも、顧況の後半生にあたる江南詩壇（本稿でいう蘇州文壇を含む）における活動に着目し、その独自の詩風の形成ついて検討しており、裨益されるところが多い。蔣寅「大曆

詩人研究」（中華書局、一九九五）、趙昌平氏「〝呉中詩派〟與中唐詩歌」（『趙昌平自選集』広西師範大學出版社、一九九七所收）、査屏球「江南與大曆貞元詩風之變」（『從游子到儒士――漢唐士風與文風論稿』復旦大學出版社、二〇〇五所收）。本稿は、そのような詩風を生み出す前段階において、顧況の文學觀について着目し、當時の文學潮流のなかでそれが如何に整理されてきたのかを指摘するものである。

(17) 劉太眞がこの時期に臺閣文學集團の指導的位置にあったとことは、貞元四、五年に禮部侍郎として貢擧を掌った經歴のほか、貞元四年の重陽節に德宗の公讌に臨んで詩を賦し「上等」の評を得ていること（『舊唐書』巻十三「德宗下」など）からも分かる。また、以下に示す韋應物の作例から彼の立場を窺い知ることができる。すなわち、建中三年（七八一）の作とされる韋應物「寄中書劉舍人」詩（『韋應物集校注』巻三）には、中央官たる劉太眞の華々しい姿が描かれる。なお韋應物はこのとき滁州刺史の任にあった。

雲霄路竟別　中年跡暫同　比翼趨丹陛　連騎下南宮
佳詠邀清月　幽賞滯芳叢　迨予一出守　與子限西東
晨露方愴愴　離抱更忡忡　忽睹九天詔　秉綸歸國工
玉座浮香氣　秋禁散涼風　應向横門度　環珮杳玲瓏
光輝恨未矚　歸思坐難通　蒼蒼松桂姿　想在掖垣中

また、さきに見た「顧十二況左遷、過韋蘇州…」詩に應酬する韋應物「酬劉侍郎使君」詩（『韋應物集校注』巻五）には、信州に左遷されてなおも中央官の人物として強い印象を與えていることが示される。

瓊樹凌霜雪　蕙蒨如芳春　英賢雖出守　本自玉階人
宿昔陪郎署　出入仰清塵　孰云俱列郡　比德豈爲鄰
風雨飄海氣　清涼悅心神　重門深夏晝　賦詩延衆賓
方以歲月舊　每蒙君子親　繼作郡齋什　遠贈荊山珍
高閒庶務理　遊眺景物新　朋友亦遠集　燕酌在佳辰
始唱已慚拙　將酬益難伸　濡毫意僶俛　一用寫悁勤

ただ、顧況についても、包佶「顧著作宅賦詩」（『全唐詩』巻二〇五）に「各在藝臺閣裏、煩君日日登車」とあり、また劉太眞「顧著作宣平里賦詩序」（『全唐文』巻三九五）に「吾君則超然如在天壇華頂之上、意喬松可得而友也」とあるように、臺閣のなかでその存在を發揮していたことが知られる。

(18) 王勃「平臺秘略論十首、文藝三」（『全唐文』巻一八二）に「文章經國之大業、不朽之能事。而君子所役心勞神、宜於大者、遠者、非緣情體物、雕蟲小技而已」とある。

(19) 一に「送劉太眞詩序」に作る。

(20) 葛曉音氏は「江左文學傳統在初盛唐的沿革」（『詩國高潮與盛唐文化』北京大學出版社、一九九八所收）のなかで、初唐から中唐初期に至るまでの「江左の風」と「建安の骨（風骨）」のありかたを檢討し、そのなかでこの時期においては兩方の主張が交錯していることを指摘したうえで、そのような狀況をひとつの循環過程のなかにあるもと看做し、これによってこれまでの文統に對する認識がさらに深化することになったと述べる（二五七頁）。

※本稿は早稲田大学二〇〇六年度特定課題研究助成費「中唐期における文学活動の地域性と文学理論の展開についての考察」（課題番号二〇〇六A―八二八）による研究成果の一部である。